

---

# code of zero

嘉瀬 史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

code of zero

### 【Nコード】

N8031X

### 【作者名】

嘉瀬 史

### 【あらすじ】

盟主ディオオーエンの復活を目論むセリエアント帝国は、大空、大地、大海、三大源の精霊の力を奪い、世界を混沌へと叩き落した。世界の機器に立ち上がったのは？零器？と呼ばれる武器を操る？戦番組？と呼ばれる者達。三大源の精霊の力を取り戻すには？歌姫？の力が必要とされる。そんな歌姫を巡る、儂く悲しくも、美しき物語。（残酷な表現、卑猥な表現描写など、苦手な方は即バックブラウザ）（作者は文章能力が皆無です）現在第一章始動中、千本の如く舞いましょうか？

## 第一章用語紹介（前書き）

前作書き終える前に近作の登場。

それはまるでゲームの様な世界観。

引き込まれる方、引き込まれない方、何れにせよ、私にとっては来てくれただけ嬉しいです。ではまずは用語紹介どうぞ！

## 第一章用語紹介

〓世界〓

東方国家群ラグナカルタは国家が集中する事で成り立つ。

各国には伝承として？ディオローエン？と呼ばれる災厄が訪れた時、ラグア？と呼ばれる救世主が来ると言う事を信じている。

（ 猶？アンチマ・イノヴェーションナル（無法侵略）？は禁止されている為、突然の戦争は有り得ないとされている ）

〓災厄ディオローエン〓

？災厄を呼ぶ者？？終焉龍？と呼ばれる圧倒的存在。

夜を喰らい、昼を貪る龍として恐れられ、人々はそれを？災厄？と呼んだ。

？千鎖？で体全体を縛り上げ、？天門？の中に閉じ込めた為、復活は有り得ないとされている。

〓零器〓

通称？零型？や？零式？と呼ばれる武器。

常人では扱えない武器として認識され、国宝級の物も存在する。

その武器に秘められた能力故に、逆に武器に蝕まれる者も居るらしい。

〓伝承〓

久遠の昔、世界にそれは現れた。人は希望を失い、廃れ、荒み、壊る。それは、世界を蹂躪し続け、遂には頂点へと君臨する。それを見兼ねた神は、人類への最後の手助けとして、災厄を封じる事とした。その後、世界は順調に信仰と秩序を取り戻し、希望の包む世界へと変えて行った。これより、世界は希望に満ち溢れたものとなり、神は最後までも言う様に告げる。再び災厄訪れる時、救世主現れる

だろう、と。

〓 シファ 〓

世界各地に存在する水晶に集う選ばれた者達。

権力に屈する事なく、水晶の意志にのみ従う存在。

保有する能力は戦闘能力に秀でた？ 零夜れいよ？と、それ以外の特殊能力を持つ？ 式典しきてん？に大きく分類される。彼等はシファになったときから不老不死を会得し、その分、長い時を過ごし続けたシファは、感情が希薄になっていく事があるらしい。

〓 魔導院 〓

都市国家には必ずとは言えないが、八割方は存在する魔法や剣術を学ぶ為の学校。

生徒は皆、魔法、剣術等得意な分類に分けられ、その中でも最も成績優良者のみ、選抜された？ 戦番組？に所属する事を許される。リフレッシュルームや牧場、闘技場、そして飛空艇発着場など、あらゆる施設を備えている。

〓 戦番組 〓

通称ナンバーズと呼ばれる幻の組。

戦番組は戦争の勃発と同時に現れ、表舞台に立つ組であり、その存在は謎多き存在として見られている。中には解放軍の援助や、帝国の陰謀を暴く者も存在し、それは依頼として受け入れる場合も有る為、一人一人が絶大なる責任感を持つ必要性がある。

## 第一章用語紹介（後書き）

如何でしょうか？

用語は今回簡単です。

馬鹿過ぎる王道な為、作者も苦笑ばかりです。  
では

## 第一章登場人物紹介（前書き）

連続投稿成り。

えと、今回は登場人物紹介ですね。

また名前が妙な主人公、とか思いますよね。

ハイ、俺も思いました。

しかもそれでいてまたコーヒー好きと言うね。

私もコーヒー好きですねえ、と言いたいです。

では、どうぞ！

## 第一章登場人物紹介

『主人公』

名前：辻井十夜

年齢：17歳

職業：高校生兼声優

部活：剣道部

口癖：『つたく』『やれやれ』『ん』『まあ』

台詞：『後味悪いと、後で飲むコーヒーに支障が出るだろ？ なら

今、その支障の原因をぶっ潰す、それだけだ』

容姿：黒髪黒眼／華奢で筋肉質だが、一度アキレス腱を切っている。本作の主人公。盟主ディオローエンの復活を察知したエクトセイイア王国によって召喚された普通の高校生。冷静沈着とは裏腹に、熱いスピリット持ち。温厚で優しく、人当たりの良い人物で、相手を小馬鹿にする様な、そんなシニカルな言動も持ち合わせている。高校生ながら声優を務め、声だけで聞き惚れる声の持ち主。運動神経は並より上ながら、頭も良し。有る意味キレの良さでは抜群で、相手の裏を掻くのが得意。ツッコミ役として稼動し、面倒見の良さとお節介から、困っている人がいると放っておけない性格で、超鈍感。克朴念仁は無自覚。無類のコーヒー好きで、超甘党。インスタント製品が全く食べれないのは欠点でもある。

『召喚師』

名前：ガントゥティアッツ

年齢：55歳

職業：召喚師

武器：杖

防具：ローブ

容姿：白髪白髭／低身長で、腰が曲がっている。



口癖：『くじや』

台詞：『貴方を召喚したのはこの私。罰ならこの私が受けます故に、助けて頂きたいのじや』

十夜を異世界に召喚した張本人。

何から何まで説明してくれる優しい人だが、一度怒ると面倒らしい。雷と風の魔法を得意とし、戦術の裏を搔く頭脳を持ち合わせている。運動より頭の方が働く為、運動不足とも言われている。

『姫』

名前：レミア＝エントセレイア

年齢：15歳

職業：姫

武器：なし

防具：王威の羽衣

容姿：金髪赤眼／華奢で小柄で低身長

口癖：なし

台詞：『貴方、童と小作りせぬか？』

エントセレイアの一国の姫ながら、ぶっ飛んだ発言や、言動をするお転婆姫。

活発克動く事が大好きで、年齢と容姿と性格が全て一致している。撫でられる事や褒められる事が好きで、そのぶっ飛んだ発言から様々な問題が発生する事もある。突然の小作り宣言などもしている為、十夜曰く『まあ可愛いが、もう少し黙ってくれ』らしい。頭は良く、作戦を立てたり、策を練ったりするのも彼女の役目とも言える。

## 第一章登場人物紹介（後書き）

如何でしたか？

少ないっ、と思う方。

まあ最初ですし、会話ばかりですが、申し訳ありません。  
ではでは！

## Prologus? (前書き)

序章1ですね。

実際長いです。

序章の癖に、とか言わないで下さいな。  
では、どうぞー！

Prologu?

「ほら、それじゃあ駄目駄目。もっと足使って」

熱気の支配する体育館に、凜とした声が響いた。

凜とした声の主は、黒い艶やかな髪を持つ青年。

身長は170センチ半ば、華奢な体だが、胴着の隙間から見える腹筋は見事なまでに四分割されている。二の腕は枝の様に細く、その手には竹刀が握られていた。

黒く、深い闇色の瞳は少女の様に大きく、顔立ちも端正ながら線の通った、女寄りの顔立ちをしていた。

その青年の前には、一人の少年が同じように竹刀を手に持ち対峙している。

「はいっ、で、でも、ちょっと……、はい」

曖昧あいまいに苦笑混じりに返答した、少年は160センチ程の身長ながら、青年同様少女の様な顔立ちをしていた。

見た所、まだ入部したばかりなのか、筋肉も余りなく、唯華奢なだけである。

「何だ？ ハッキリしないと解らないぞ？」

青年は首を傾げて、竹刀を肩に担いでから歩み寄った。

少年は小さく笑みを零してから「ちょっと怖いです」と呟いた。

「怖い？」

尋ねれば、青年は少年の視線の高さまで腰を落とした。

「はい」少年は頷いてから「何て言えば良いか解りませんが」と

頬を掻きながら、そう漏らした。

「怖い、ね……。まるで当時の俺だな」

青年は苦笑をしてから、くしゃっと少年の頭を撫でた。

「な、何を……？」

撫でられた側は撫でられた側で驚愕しながら、青年を見詰めている。

そんな事知るかとも言う様に、青年は可笑しそうに笑ってから「悪い悪い」と続け「いやあ、昔の俺を見ているみたいでな」と紡いだ。

「昔の、先輩ですか？」

少年は首を小さく傾げる。

「嗚呼、俺も前は竹刀同士がぶつかるのが怖くてな。特に剣道を着てないと特に」

クツクツと未だに笑みを口端から漏らしながら続けた。

「だから俺はな、俺の二つ上の先輩。まあもう卒業しちゃったが、女の先輩にな。どうしたら怖くなくなるか、を聞いてみたんだ」

視線を少年に向けてから、小さく頷いて「怖がるから怖いだよ、視線を少年に向けてから、小さく頷いて「怖がるから怖いよ、怖いってじゃあ怖がらなきゃ良いのか？ ってね」

「その先輩も無茶苦茶ですね……」

「だろう？ でもな、実際竹刀同士がぶつかるのを怖がらないようにして、きちんと相手の動きを見てから動いたらさ、全然怖くなくなつたのさ」

少年は驚いた様な表情をして「本当ですか？」と尋ねて来る。

「ホントホント、嘘だと思ったら顧問の津田にでも聞いてみな？」

「津田先生ですか……？」

「嗚呼、あの先生も似た様な事を言っただけだからな」

まあ暑苦しい事この上ないが、と苦笑混じりに呟いてから、青年は竹刀を再び右手に握り構える。

「じゃあ続けるかね、津田に見付ければサボってるって思われるか

らな」

「あ、はい！」

「良い返事だ」

再び竹刀を構えて対峙する二人。

張り詰める空気。

ぴりぴりと、肌が引っ張られる様な感覚に意識を集中すれば、同時に踏み出す。

熱気の支配する体育館に響いたのは、竹刀同士がぶつかる音。

しかしそれよりも、少年を褒め称える青年の声の方が大きかった。

**Prologus? (後書き)**

どうでしたでしょうか？

青年と少年。

名前はまだない。

いや、本当は出そうか出さまいかで悩んだんですけどね……。

では、次回！

では

## Prologue? (前書き)

はいはいどうも、第二序章。

此処でそろそろ急展開。

では、先に告知を。

私嘉瀬、テスト期間により投稿が遅れます。

ハイ、申し訳御座いません。

それ故に、少しばかり皆様を待たせる可能性があります。

ご了承下さる事を願っております。

では、どうぞ！



## Prologue?

午後7時45分。

結局練習はこの時間まで伸びた。

実際全身筋肉痛である。

常連者と言えども、3時間に及ぶ練習では流石に辛い物がある。それ故に、彼 辻井十夜もまた筋肉痛に悩まされていた。

全身の筋肉、特に太腿と脹脛、ふともも腹筋が悲鳴を上げているのが解る。「明日の体育、支障が出なければ良いが……」

深い、それも仕事に疲れたサラリーマンの様な溜め息を吐いてから、十夜は頬に当たる冷たい感触に右目を閉じた。

「あ？ 雨……？」

既に太陽は沈み、黒色とも藍色とも呼べぬ空を十夜は見上げる。

天気予報では今日雨の予定はない。

「天気予報、外れたか……？」

完全に降り始める前に帰り着きたい。

「明日からは折り畳み傘常備だな、こりゃ」

やれやれ、と肩を竦めてから駆け出す。

筋肉痛は響くも、今はそんな事に構ってはいられない。と。

「げっ、降り始めやがった……！」

ポツポツと地面を濡らす雫。

土砂降りになるのも時間の問題のようである。

「濡れるのだけは勘弁してくれ……、明日仕事有るんだぞ」

駆けながら呟けば、荒れ始めた天気<sup>に</sup>愚痴を漏らす。

「そもそも天気予報が外すのが悪いんだ、そうだ、そうだよ。風邪引いたらそう言おう」

風邪を引いたのは自己管理の問題だ、と言われてしまえば終わり

の様な気もするが、それは黙って置くとしてしよう。  
そもそも仕事とは、彼は高校生ながら最年少の声優として芸能界に立っている。

それも人気アニメの主人公の役。台詞が多くて困るのだが、逆に多ければ多いほど燃えて来るのが彼、辻井十夜なのだ。燃える、と言う言葉が似合わなさそうにも見えるが、実際は一番暑苦しい男なのかもしれない。

「此処まで来てかぁ……」

コンビニの屋根の下で雨宿りしながら、轟音を響かせ降り始めた雨に溜め息を漏らした。

普通なら、此処からならば徒歩でも10分で着く。

しかしこれでは、帰れるものも帰れない。

「はぁ……、最悪」

瞬間。

「は？」

落ちた。

いや、落ちた、と言うより、落とされた。

何が起きたか解らぬまま、落下して行く十夜。

決して段差があった訳ではない、唯のコンクリートの地面に彼は立っていた。

それなのに、落ちている。

遂に光まで消え去った漆黒の空間を落ち続けながら、呟く。

「……幻覚か？ それともあれか、ドッキリか？」

あくまで現実逃避。

現実直視何て出来た物ではない。

マトモに直視しよう物なら、危ない世界に心を持って行かれる気

がしてならない。

と。

直後、漆黒の間は破く様に引き裂かれ、一面の光が彼を包む。

「な……っ、眩しっ」

この光が、彼を破滅へと叩き落とすとは、誰一人思わなかった。

## Prologue? (後書き)

前言撤回。

巻き起こっちゃいました。

どうでしたでしょうか？

とうとう第一章突入ですね。

漸くですよ、漸く。

では次回予告。

『破滅へと叩き落された十夜に待ち受けていた物は、  
改変？

盟主？ 世界の平和？ 零……？

それは現代の人間には理解できぬ事ばかりだった』

## Episode 2 (前書き)

エピソードワンですね。

さてさて、どうなるのか。

落下途中より開始します。

では、ごんげー！

## Episode ?

「何処だよ、此処……?」

眩い閃光の如き光が消え去った今、十夜は見ず知らずの場所に居た。

十夜にとって此処は帰り道のはずだった。

それなのに、何故目の前に神殿の如き空間が広がっている?

「……嗚呼、夢か、これは」

現実逃避。

試しに頬を抓り、引っ張ってみる。

しかし、結果は予想通り。

「……痛い」

結論から言えば、これは夢ではない。

それでは自分は一体何処に来てしまったのだろうか?

「取り敢えず目印に成る様な物を探すか……」

立ち上がり、周囲を見回してから、天を仰いだ。

「高いな……、これは」

天に上れば確かに情報を得られるかもしれない。

見知らぬ場所へと来たら、まず高い場所から位置確認。

それをしたいのだが、

「……これ、登るのか」

エレベーターがなければ、エスカレーターもない。

螺旋階段一本。

「殺す気かよ、この塔の設計者」

愚痴を漏らしながら螺旋階段へと歩み寄る。

と。

「待たれよ其処の者!」

声が背後から聞こえた。

人が居る、と言う事は一応地球の様だ。

それも日本語、と言う事は日本の何処かなのだろうか？ いや、しかし日本にこんなにも大きな塔の如き建物はなかったはずだ。新たに出来たと言う話も聞かない。

では、此処は何処なのだろうか？

「はい？」

声の主の方へと振り返る。

其処には金系銀系刺繍の成された淡い紫色のローブに、長い白髭しろひげを生やす、右手に杖を持ったRPGにでも登場しそうな老人が居た。

「一つ聞く」

老人は杖を突きながら歩み寄って来る。

「何処から来た？」

逆に此処は何処ですか、と尋ねたい所だが、十夜はその想いを飲み込み、老人の問いに答えた。

「日本です。日本の埼玉県さいたま市」

返答次第によっては殺す、と言う時代劇を見た事があるが、あれは理不尽だと、未だに思う。

改めて日本に生まれて良かったと思う十夜だった。

「ニホン……、ではもう一つ聞く。名は何と言う？」

もう既に眼前まで歩み寄っていた老人は、その細くも切れのある瞳で十夜を見据え、尋ねる。

「辻井十夜。見ての通り、学生です」

嘘を吐いても良い事がなさそうなので、十夜はそう返答する。

「ツジイ、トオヤか……。ではツジイ殿」

「殿……？」

俺何処まで格上げされたの、と心の中でツッコミながら「はい？」と尋ねる。

「これより貴方様を城へと招待したいのだが、どうだろうか？」  
老人は再び、その鋭い瞳を十夜へと向ける。

しかし声は柔和で、最初の頃の尖った様子はなさそうである。  
勿論断る理由もなかったので、十夜は「良いのなら」と呟いて、  
招待される事となった。

其処で気付く。

「城……？」

「ほお……」

老人に連れられ、十夜はヨーロッパ風の街並み広がる広場らしき  
場所に来ていた。

「申し遅れましたな」

その街並みに感心していると、老人は此方を振り返り、そう呟い  
た後「私の名前はガント・ティアッツ。城では召喚師をしています」  
と続けた。

「召喚、師……？」

可笑い。

城がある？ もう城は跡地しかない。

日本にこんなヨーロッパ風の街並みがあったか？ ない。

そもそも召喚師？

様々な疑問が浮かび、重なり、彼を悩ませる。

ガントは十夜を導きながら、立ち止まる。

「これより先が我が城、エントセレイア城じゃ」

「エント、セレイア……？」

もう既に口が半開きである。

日本にそんな城はない。

（本当に此処何処だよ……、何か、俺はあの落ちた時にフランスに  
でも来ちまったのか？）

考え得る可能性を上げてみる、が。有り得ないと気付き、溜め息



を吐く。

「では参りましょうぞ、ツジイ殿」

「あ、はい」

今は着いて行くしかない、そう思った十夜は黙ってガントの後を追った。

既に日の落ちた闇夜に、二人の歩む足音が奇妙なまでに鳴り響いた。

Episode? (後書き)

どうでしたでしょうか？

ちよっと長文ですかね？

まあ、長文目当てではないですよ？

長文だと読むのに疲れちゃいますしね。

では、次回予告！

『連れて行かれたエントセレイア城。』

其処で出会ったのは、お姫様？

十夜に任せられたのは、重過ぎる事だった』

## Episode ? (前書き)

ハイ、第二回反省会の時間DHEAT！  
確実に深夜投稿となった私ですね。

ハイ、どうしましょうと考えました。

読者を増やそう、そう考えます。よし、頑張れ私！！  
では、どうぞ

## Episode ?

駆動音を上げて観音開きを開いていく門の先へ、十夜とガントはゆっくりと踏み出した。

(これは……、確実に日本の物じゃねえな……)

真っ先に飛び込んで来た城を警備していると思われる兵士を見て、十夜は心の中で呟いた。

警備するのは日本でもしている事なので、構わない。

しかし、警備している者達の纏っている物が物凄く可笑しいのだ。例えば城門周辺を警備しているあの男。軽装備だが、金属の胸当てと、肩当。手には長槍を持ち、不法侵入者が現れればいつでも対応出来るような、そんな状態を醸し出している。

(本当に此処何処だよ……)

石畳の立派な通路を抜ければ、待っていたのは再び扉。

それも荘厳華麗な、見事なまでに飾られた扉だった。

「ガント!! ティアッツ。帰還した」

老人がそう告げると、扉がゆっくりと開かれる。

観音開きが主流なのか、どの扉も開き方としては観音開き。

それとも唯単に作り易かっただけなのか、それはもう設計者以外解らない事である。

「へえ……」

完全に開かれた扉の向こうには、赤絨毯が敷かれ、来訪する者を待っているかの様に幾つ物柱が赤絨毯を囲むように聳え建っている。

「ドイツにでも来たかね、俺は……」

我知らず漏れた言葉に、ガントは「ドイツ?」と首を傾げた。

「嗚呼、いや、その、この城に似た城がそのドイツと言う場所に在りまして……」

あはは、と笑って誤魔化せば、ガントは「ほお」と感心してから「いつか行ってみたい物じゃな」と頷いてから笑った。

(あれ……、案外打ち解けてる?)

歩みながら思った。

打ち解けてなければ笑い合える事などないだろう。

(よし……、少しずつ打ち解けて行って全部聞き出してやる……)

小さく決意した様に頷けば、立ち止まるガントに首を傾げた。

「どうかしましたか?」

「到着です」

「はい?」

何処に、そう思いながら視線を横に移す。

其処には再び巨大な扉が待ち構えていた。

「……扉多いな」

「私もそう思います……」

案外同じ事を思っている人は傍に居た。

扉が押し開かれる。

今回は人力で、ガントと十夜二人で押し開けた。

案外軽い。いや、もしかしたら素材が軽いのかもしれない。

そんな事を思いながら、

妙な寒気を覚えた。

背筋にゾクツと来るこの感覚。

冷汗が零れ、悪寒が走り続ける。

と。

「貴殿が召喚された者か?」

艶やかな、それでいた透き通った声はその空間に響き渡った。

「ッ……」

十夜は一度、身を震わせてから、声の主へと視線を遣る。

其処に居たのは、美女だった。

金色の、黄昏を思わせる色合いを持つ長い髪に、揺れる前髪の間から覗く、人間の瞳とは思えぬ真紅の瞳。端整な顔立ちは、何処か威厳の有る、凜とした顔立ちにも見えた。

ボデイラインは、グラビアの美女達を軽く凌駕する。もし隣にグラビアの美女が居たとしても、迷わず十夜ならば隣の金色の美女を採るだろう。

と、スツカリ惚けていると、美女は再び尋ねて来る。

「もう一度聞く。貴殿が召喚された者か？」

召喚？ そう思っていると、隣のガントから服の裾を引っ張られ小声で「頷いて下され」と告げられる。

十夜は言われた通り、小さく頷いてから「そうです」と答えた。すると美女は顔を輝かせ「そうかそうか」と満面の笑みで頷いてから十夜へと駆け寄り、

「待っておったぞ！」

抱き着いて来た。

「……はい!？」

一瞬対応が遅れ、十夜は抱き着く美女を、勢いも合った為に倒れる紙一重で抱き止めた。

「住んでいた場所は？ 名は？ そもそも何者なのだっ？」

抱き着いたまま興奮した様に矢継ぎ早に尋ねて来る彼女に十夜は困った様に唸った。

「どうした？」

十夜の様子に首を傾げる。

「いや、どう説明したら良いか……」

唸りながら呟く十夜に、彼女は無邪気な笑みを零し「何でも良い、貴殿の好きな様に説明するが良い!」と言って来た。

その言葉に安心したのか、十夜は微笑んで「そうですか、では」と紡いで「日本の埼玉県さいたま市出身の辻井十夜です。何者と言われれば、人間で、学生、ですかね?」と頬を掻きながら続けた。

「ツジイトオヤか、ではトオヤ! もう一つ質問だ!」

ぴよんぴよんと跳ねる彼女に十夜は、妹を持った様な気分になりながら振り回されつつ「何ですか?」と尋ねた。

「そなたが救世主なのか?」

返答に困ったから黙ったのではない。

救世主ラグアが何なのか知らないから黙ったのだ。

(救世主って何さ、いや、今で精一杯の俺にハイそうですと頷けと!?) 流石にそろそろ厳しいぞ、オイ……、誰が説明プリーズ)

天を仰ぎ、唸ってから最善策を捻り出した。

「どうなのだ、トオヤ!?!」

爛々(らんらん)と輝く瞳に気圧されながらも、十夜は彼女を見詰めてから紡いだ。

「ハイ、多分そうだと思います」

「多分……? そうか、まだ確信を得た訳ではないのだな!?!」

「ハイ、まだちよっと学び切れていないので」

「そうかそうかつ、ではトオヤ。ちよっと耳を貸せ」

「はい?」

言われた通りに耳を貸す。

「今宵、童わらわの部屋に來い……、良いな?」

数秒時間が停止した。

「……………はい?」

続いて素っ頓狂な返事が出た。

「そうかそうか、ではな！」

そして了承された。

「ちよっと待って下さ、「ツジイ殿！」はい!？」

そろそろ脳内収集の付かなくなってきた十夜を止めたガントは、一つの扉の前に立ち、手招きをしていた。

嫌な予感しかないのは、気のせいだろうか？



**E p s o d e   ?   ( 後 書 き )**

どうでしたでしょうか？

急展開にも急展開。

急展開過ぎてワロタになりそうですわ。

では、次回予告！！

『 部屋に招き出された十夜！！

どうなる十夜、大丈夫、きっと！！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8031x/>

---

code of zero

2011年10月22日04時35分発行